

北東アジア諸民族の靈魂觀

— 魂の不滅と全身骨からの蘇生 —

于 曉 飛

はじめに

中国東北部の少数民族ホジェン族には彼らのシャーマニズムを反映した口承文芸「イマカン」がある。語りと謡いから成る英雄叙事詩で三十四編採取されており、シャーマンが死者の魂を遺体に戻すことで生命が蘇るといふあらすじが多い。その代表例に「シタ・モルゲン」がある。亡くなった母親の魂をシャーマンが冥界（陰界）から取り戻し、それを残った全身の骨に還して祈りを捧げると母親が蘇える、という物語である。他に、満州族の「尼山薩滿」を基にしたイマカン「一新薩滿」にも似たストーリーがある。誤って冥界へ拉致された子供の魂を女のシャーマンが連れ戻しに向かうが、その途中、偶然にも彼女は死んだ夫の魂に出会う。夫は自分を生き返らせるよう懇願するが、彼女は出来ないと答える。既に死体は朽ち果て、もはや生き返らせることが出来ないためである。

この二つのイマカンから筆者は、骨や死体の有無が蘇生にどのように関わっているのか、周辺民族の靈魂觀と骨からの蘇生に関する神話や伝承等を調べることにした。対象を北東アジアの民族に限定した理由は、筆者が長年研究対象としたホジェン族と隣接した民族との関係性を明らかにするためである。死から復活する話は世界中多くあるが、ホジェン族とその周辺民族のシャーマニズムには何らかの共通性が見いだせるのではないかと期待も執筆動機となった。

本論では、ホジェン族の周辺の北東アジアの諸民族（モンゴル、ブリヤート、コリヤク、ユカギル等）の靈魂觀と骨から死者を蘇生させる神話・伝承の比較を試みた。靈魂が不滅であるとはいえ、蘇生させるには全身の遺骨だけでなく、シャーマンやカッコウ（鳥）などの支え、更には命の水など必要とされる。蘇生に必要な儀式もまた民族ごとに特徴がある。

調査対象のホジェン、ブリヤート、コリヤク、ユカギル、ヤクト、チュクチ（図1 北東アジアの民族の居住地参照）に

ついては、一九一〇年から一九四〇年にかけて、凌純声、ロバート・シロコゴフ、カーティン、ジョチェルソン、ボゴラス、ツァプリスカにより、民族調査と伝承の収集が行われ文献も公開されている。文献は巻末に記載した。但しヤクト、チュクチについては、本論のテーマでもある骨からの蘇生に関する伝承を見出せないため除外した。モンゴルについては、多くのジャンガルがあるが、蘇生に関する記述がある「ゲセル・ハーン物語」を取り上げることにした。

一 北東アジアの民族の靈魂觀

北東アジアの民族の靈魂觀では、人が睡眠中見る夢は肉体から抜け出した魂の経験であるとされる。また、魂が怪我をすれば、肉体もまた同じ部位が病気になると思われている。魂には、誕生、生命、死の三つの段階があり、死後も不滅か、または生まれ変わる。とりわけ狩猟民族には、食した獲物の骨が再び生き返り、また獲物となって戻ってくることを祈る、願望に近い信仰が根強い。人間も同様に、靈魂が不滅であるが故に全身の遺骨から生き返らせることが出来ると信じられているようである。

一〇一 ホジェン族の靈魂觀

(ア) 一九二〇年代

ロシアのロバート・シロコゴフの調査によれば、当時ゴリド族と呼ばれ



図1 北東アジアの民族の居住地

ていたホジェン族の靈魂觀では、魂はオミヤ (omiya) エルゲニ (ergeni) ファニヤ (fanya) の三種類ある、という。オミヤは一歳未満の子供の魂で、その姿は小鳥に似ている。エルゲニは、一歳から死に至るまで誰もが持っている。人は死ぬとその魂はファニヤになり、冥界ブニに赴く。子供が二

歳になると、魂もオミヤからエルゲニに変わる。「エルゲニ」は雀のことだが、当時は雀ではなく、魂の持ち主に似た小人の姿をしていると信じられていた。そのエルゲニが健康なら持主も生き伸び、エルゲニが病気になるれば持主もまた発病する。悪霊がエルゲニの手をかみ切ると人も同様に手を失い、エルゲニの眼玉を抉り取ると人も失明する。悪霊がエルゲニを殺すと人も直ちに死ぬ。逆にエルゲニが生きていさえすれば、いかなる力によってもその人を殺すことはできない。こうした考え方は

さまざまな精霊の物語に共通してみることが出来る [Lopatin
一九二二 一九八二〇〇頁]。

(イ) 一九二〇年代

ロシアのシロコゴフの調査によれば、ツングース族と満州族は生命を保つ「非物質要素」としての魂があると信じていた。その魂には、真魂、主要魂、表面魂の三つの側面があるとされる。真魂ウネンギ・フォヤンゴ (wunengi fojengo) は母親であるオンコシ・マブ (ongosi manna) から子供に授けられる魂で「意識」「自己認知」を司るが、「思考」とは異なる。「思考」ゴニン (gonin) はすべての魂の活動の結果として与えられるものである。この真魂が果たして動物にも存在するかどうかは不明である。主要魂セルギ・フォヤンゴ (sergi fojengo) は、種保存の生物的能力を持ち、高度の精神機能を司る。死後一時期は体内に留まり、その後オンコシ・マブのもとに戻って他の子供に宿る。表面魂オロルギ・フォヤンゴ (olorgi fojengo) は、冥界の精霊イルムハン (ilmuxan) から授かり、死後イルムハンのもとへ戻り、その後は別の人や動物に生まれ変わる。こうした考え方は「輪廻転生」という仏教的概念が変化したものと考えられる。真魂が体外へ離脱すると、人は意識を失い、また夢の中で旅をして、遠くと交信したり、他の人の中に潜り込んだりである [Shirokogov S.M. 一九三五 一三四—一三五頁]。

この魂の他にも、オミシ (omi) という子供に見られる別な魂

れる。

一つ目は、調査の対象と地域の範囲が異なる。ロバーチンはアムール、ウスリー、スンガリー河流域に住む広域のゴリド族 (現ホジエン族を含む) を調査対象としたのに対し、凌純声は、その一部の松花江 (スンガリ河) 流域に留まった。一方シロコゴフの調査対象はゴリド族のみではなく、北からアムール河沿いに南下してきたツングース族と満州族である。

二つ目は、氏族間での霊魂観の相違である。シロコゴフの定義によれば、「氏族」とはツングース民族全体の内にある副単位のこと、「一人の男性の祖先を崇める個人の集団」を意味する [シロコゴフ著、川久保梯郎・田中克己訳 一九四一 二三—三五頁]。氏族は小単位で、広い地域に散らばっており、加えて、隣り合う異なる民族同士の通婚により霊魂観も入り乱れた可能性がある。その結果、両者の調査した霊魂観も相違していた可能性は否定できない。

三つ目は、取材に応じた個々人の魂の概念の「曖昧さ」に起因する。一般人はシャーマンに比べ、魂の概念についての知識も曖昧なものではない。シャーマンは、自分の経験や先祖からの言伝えを知っているだけで、別のシャーマンは、別の経験を持っている。したがって、霊魂観として体系化されていないかもしれない。そのような状況において、キリスト教や仏教などの思想に染まった学者が自らの尺度で取材内容を解釈したために、このような相違が生じたものと思われる。

の概念があり、精霊オミシ (omi) の活動につながる [同上
五一—五四頁]。

(ウ) 一九三〇年代

凌純声の調査によると、ホジエン人は、人には三つの不死の霊魂があると信じている。

第一の霊魂オレン (olen) は生命の霊魂で、人も動物も生きとし生けるものすべてが持つが、死後は肉体から離れてしまう。第二の霊魂ハニ (hainn) は思考の霊魂で、短時間ならば肉体から離れることができる。人が寝ている間、ハニはその肉体から遊離し他の霊魂と会うことができる。第三の霊魂フィアンク (fiangan) は転生の霊魂である。人が死ぬと直ぐフィアンクはその肉体から離れ、来世で再生する能力をもつ。

人は死ぬとその霊魂は肉体から消滅する。その後一周忌または百日を経て、シャーマンは送魂の儀式を行い、犬轎に乗り神鷹コリの道案内を得て、その魂を冥界ブニオ (bunio) に届ける。シャーマンは儀式の間、通過中の位置をその家族たちに逐次報告する。死者は、天国、人間、地獄の鬼神の狭間で、最終的に鬼ブシユク (busyuku) になる [凌一九三四 一〇二頁]。

以上述べたように、ロバーチン、シロコゴフ、凌純声の三名は、ほぼ十年ごとに同じ中国東北部に住む民族の霊魂観を調査しているが、なぜ説明が異なるか。原因は三つあるように思わ

一 二 三 他北東アジアの民族の霊魂観 (モンゴル、ブリヤート、コリヤク、ユカギル等)

(ア) モンゴル

モンゴルの霊魂スウンスは死後も不滅で、霊界から子孫や関係者に種々の影響を及ぼすと考えられている。基本的にモンゴル人も魂が三つあると信じているようである。

モンゴルの学者チ・ダライによると、魂は、生命魂、遊離魂、転生魂の三つあるという。生命魂は死後も不滅で死霊となって子孫を加護する。遊離魂は一時的な魂で、肉体から永遠に離れることはなく、現生を彷徨う。人の睡眠は一時的な死を意味し、その魂は肉体から離れてなにか物事をこなして後に肉体に復帰する。逆に転生魂は死後肉体から永遠に分離し、顔を変えて別人として生まれ変わるのである [サランゴワ 二〇一一]。

(イ) ブリヤート

人は三つの部分から構成されているとブリヤート人は信じている。物質的な肉体としてのオイエイエ (oyeye)、下部に存在する魂アミン (amin) (息)、そして、人のみが持つ魂スニエスン (sunyesun) である。アミン (息) は死と直結しており、それが肉体から離れると死に至るとされる。スニエスンは、人が眠っているときに肉体から離れることができる。満州族の夢の霊魂、あるいはモンゴル族の遊離魂に似た霊魂である。

人は死期が迫ると、悪霊エリンク (eliks) が魂の一つを捕え、審判のため悪霊王 (Erik-Nomon-Khan) のもとへ連れて行く。この魂が捕えられた後も、その持ち主である人は時として九年も生きながら得る場合もあるが、決して元の健康体に戻ることはなく [Czaplicka M.A. 一九一四 二八七頁]。

睡眠中に肉体から遊離した魂が、経験したことが夢で、それを他者に伝えることができる」とされる [ウノ・ハルヴァ著、田中克彦訳 一九七一 二二三頁]。

(ウ) コリヤク

コリヤク人は魂のことをウイシテ (uyich) という。死んだ親戚の魂ウイシテを、神が母の子宮に送り込むことにより新たな命が誕生する。一方、人の死は、悪霊カラウ (kalan) に殺される不自然な出来事とされる。時としてタブー違反や神に生贄を施さなかった罰として、神から死を賜ることもある。魂ウイシテが悪霊カラウに襲われる時、驚きのあまりその肉体を放り出して神のもとに赴く。ある説によると、悪霊カラウ自らが人体から魂を引きずり出して天に解放し、カラウ自身は死者の肉体や残りの魂を自分のものにする。人は魂なしでは生きていけないが、そこには何か別の生命原理が、二次的な魂が存在するのかもしれない。その生命原理とは呼吸 (wiyivi) と影 (wuyiwuyii) である [Lochelson, W. 一九〇八 一〇〇-一〇二頁]。

一九〇八 一〇一頁 注釈】。

二 全身の遺骨からの蘇生

冒頭述べたホジエン族のイマカン「シタ・モルゲン」[「新薩満」にみられる生命蘇生の条件と手段については、ホジエン族に加え、モンゴル、ブリヤート、コリヤク、ユカギルにも骨から死者を蘇生させる神話伝承等が存在する。それらの分析結果を踏まえ、各民族の靈魂観の特徴を調べる。

二一 ホジエン族の「シタ・モルゲン」

まだ子供のシタと姉は、自殺した母の遺体を柳の枝で覆い、姉と共に故郷に別れを告げた。成人後、姉夫婦と三人で故郷に戻り母を蘇らせようとする。先ず柳の枝の下に隠しておいた母の遺体の骨を卓上に載せ、魚皮で作った衣を被せた。その後シタ・モルゲンは、太鼓を掴みシャーマンの舞を舞い始めた。夜も休むことなく、歌い、舞った。舞いながら神に祈る『母の魂を直ぐに返してください』。舞い続けること二週間、母の骨一面に肉が付いた。魚皮を被せて更に舞うこと二週間、筋肉もでき、肉も増えた。次の二週間ですっかり人の形になり、更に二週間経つと肉と皮もついてすっかり以前の姿に戻った。次の二週間では顔に血の気が戻り、その次の二週間後に母は微笑んでいた。更に二週間後、ついに母は起きあがり笑顔を見せてくれた。シ

(エ) ユカギル

北極圏に住むユカギル族にも、三つの魂アイビ (ai:bi) がある。頭のアイビ、心臓のアイビ、体全身のアイビである。人が病気になる原因は二つある、とされる。一つは、頭のアイビが陰の王国アイビジ (abi:ji) へ出発した場合、もう一つは、邪悪な者クツクル (ku:ku) や疫病をもたらす邪悪な霊ヨイベ (yo:be) が体内に侵入したのに驚き、頭のアイビが下界へ逃れた場合である。いずれも死に至る前に、シャーマンが陰の王国へ降りてその魂を連れ戻すことができる。人が見る夢は睡眠中に頭のアイビが肉体を離れいるような活動をするためであるとされ、ここにも他の民族の靈魂観との類似性が見てとれる。二番目の心臓の魂アイビは生命維持に重要な魂である。三番目の体全身の魂アイビは太陽の光を受けて地面に影を落とすが、死者にはその影がない。人は死ぬと、頭の魂アイビも陰の王国に向かうとされるが、残りの二つの魂がその後どうなるかは現代のシャーマンにも不明であるという。魂アイビの姿はその持ち主に似ているが形は小さく、生きている者には見えない。生命体でない物体にも、魂は一つだけある。一方、生命体の動きは心臓の魂アイビに依存している。地域によって、魂の解釈はいくつかに分かれている [Lochelson, W. 一九二六 一五六-一五七頁]。

なおジョチエルソンは、「ユカギルのこれらの靈魂観はヤクートの三つの魂の借用」であることを認めている [Lochelson, W. 一九〇八 一〇一頁 注釈】。

この物語には遺骨を保存する柳の枝が登場するが、柳は北方狩猟民に遍く崇拜されており、ホジエン族に文化的影響を大きく与えた満州族にとつても神樹である。この物語において全身の骨とシャーマンの儀式に加え、柳の枝葉で骨を保護した文化的背景も見逃すことができない。なぜなら、そこにはホジエン族や満州族の柳崇拜が根付いているからである。

シタ・モルゲンの物語はシャーマニズムが根底にあり、ゴリド族 (ホジエン族の祖先) やツングース族 (ゴリド族を含む大きな纏まり) のシャーマニズムを受け継いだものと思われるが、一部に仏教や道教の冥界の描写も取り入れている。十九世紀、黒竜江省にホジエン族の人口の千倍にもなる一千万人近くの漢族が入植したが、そこで催された芸能などを媒体とした仏教や道教の影響によるものであろう。シャーマンを通して肉親を蘇生するイマカンは他にも数多く存在するが、ここでは全身の骨からの蘇生だけを取り上げて紹介した。

二二 ブリヤート

一九〇〇年、アメリカ人の民間伝承収集家カーティン (Curtin) は、ブリヤート族が住む南シベリアのバイカル湖周辺に残る伝承を調査したが、その記録は、彼の死後一九〇九年に「南シベリア旅行記——モンゴル族、その宗教と神話」(A Jour-

ney in Southern Siberia by Jeremiah Curtin) として出版された。ブリヤートの文化はモンゴルを經由したチベット仏教の影響が強く、チベットの「ゲセル・ハーン物語」もその一つである。そこにはシャーマニズム的要素もいたるところに垣間見ることが出来る。

(ア) 伝承「アラマルドジンと双子の妹ハンハイ」

兄アラマルドジン (Almatdin) の死を悼み、妹ハンハイ (Hanhai) は兄を生き返らせるため、地球の反対側の湿地まで赴き、命の水を汲んでカッコウ(鳥)に助けを請うた。その願いを叶えるために、カッコウは妹を連れて兄が埋葬された地に飛んだ。そこで三日もの間、天帝ブルカンに祈りを捧げたところ俄かに地面が開き、兄アラマルドジンの遺体を引き出すのに成功した。遺体は、右の肩甲骨を除き、兄の全身の骨はすべて揃っていた。肩甲骨を運び去った狐を追って取り戻し、それを元の正しい位置に戻した。揃った全身の骨に生命の水を注ぎ、カッコウが兄の足元から頭頂まで歌いながら歩いた。するとどうだろう。兄はすつくと立ち上がってこう言った、『私はここでどれくらい寝ていたのだ?』(Curtin J. 一九〇九 二七五―二七七頁)。

この伝承では、骨が全て揃っていることに加え、命の水が必要な点とカッコウがシャーマンの役割を果たしている点の特徴的である。

(イ) 伝承「鉄の英雄」

鉄の英雄は敵の英雄との戦に敗れ、鉄製の樽に詰められて黒霧海に沈められた。鉄の英雄はカッコウに助けを求めた。白いカッコウは、九〇匹の狼を連れて救助に駆けつけた。カッコウが歌いながら海岸に沿って三回飛ぶと、黒霧海が干上がった底には鉄の樽が見えた。九〇匹の狼は樽の中から鉄の英雄の全身の骨をとりだし、海岸に居るカッコウのもとへ運んだ。カッコウが歌いながら鉄の英雄の足元から頭まで歩くと、肉が彼の骨に付き始めた。二度目には微かに息をし始めた。三度目にはついに跳ね起きて言った、『私はどのくらい眠りましたか?』そして彼は泣き始めた。自分の身に何が起こったのかを思い出すと、彼はカッコウと九〇匹の凶暴な狼に感謝した(同上 一六四―一七七頁)。

この伝承は、蘇生に遺体の骨とシャーマン役のカッコウが必要な点は、上述のアラマルドジンと妹の伝承と似ているが、命の水は登場しない。しかし、同じ「鉄の英雄」(同上 一七〇頁)の中に、骨と化した多くの人々に生命の水を浴びせて、生き返らせる逸話も存在する。

(ウ) その他の伝承

「フンクバイと丸頭の馬」(同上 二二二頁)では、骨と命の水は登場するが、シャーマン役は存在しない。また、伝承「バルハン・ツライ・フブン」(同上 二二八頁)では、死体に命の

水をかけ蘇生させるくだりがある。さらに伝承「イエレンテ・カインと息子ソクト」(同上 二五六頁)でも、全身の遺骨に命の水をかけて人を蘇生させる。その際、骨の並びが生前の姿のように整然としていたかどうかは定かでない。

このように、ブリヤートの伝承ではシャーマンは登場せず、カッコウが蘇生のための儀式を行い、シャーマン役を果たしている。命の水は聖水として世界中の伝承に存在するが、ブリヤートの「命の水」は、地理的に隣接するモンゴルの口承文芸「ゲセル・ハーン物語」の口承を通じて入った可能性が高い。

また、ブリヤートにはモンゴル以上にシャーマニズムを色濃く反映した伝承を見いだすことができる。死者の姿を透視できる能力を持つ者が、子供の魂を冥界へ運ぶ死神に出会い、死神たちを騙して子供の魂を取り返し、その遺体に戻して蘇生させる、などの伝承がその例である。

二二三 モンゴル

「ゲセル・ハーン物語」(若松寛訳一九九三年)は、チベットと中央アジアに伝わる叙事詩であり、チベット仏教を背景とした物語で、天界の最高神、帝釈天が、その子ゲセルを地上に派遣し、地上の悪魔や魔物を退治する物語である。人は死後もその魂は不滅であると考えられている。この物語に見る靈魂観は、シャーマニズム的要素が強く、シャーマンは登場しないが代わりにカッコウがシャーマンの儀式を司るのである。以下、題材

を数例紹介したい。

(ア) 第六章「三十勇士の復活」

仏祖は、千仏がおわします黒い鉢の中から甘露水をお手元の瓶に汲み取って帝釈天にお渡しになり、こう仰った。『その甘露水をウイル・プトウークチ(ゲセル・ハーン)の天界における本名)に届けてやれ。まずは、勇士達の遺骨の上に一滴ずつ注げば、骨と関節が整い肉と皮が生ずるのである。次の一滴で、五臓六腑が付き、魂が入るのである。最後の一滴で、元の肉体に戻るであろう。次いで仏祖は、もう一つの甘露水の瓶を取り出して仰った。『その甘露水を飲ませれば、遊離した守護霊が元の体内に戻り、五臓六腑も動き出して、完全に元の姿に戻るであろう。その甘露水を得たゲセルは、心に太陽が昇ったかのように欣喜し、すぐさま勇士達の遺骨の上に甘露水を滴らして回った。第一滴目を滴らすと、骨と関節が整い、肉と皮が生じ、第二滴目を滴らすと、五臓六腑が付き、魂が入り、第三滴目を滴らすと、元の肉体に戻った。次に、もう一種類の甘露水を飲ませると、遊離した守護霊が元の体内に戻った(同上 二〇六一―二〇七頁)』。

(イ) 第十章「二十一首魔王征伐」

大勢の勇士達が死んだ。ゲセルは、天の三人の姉からもらった「甘露水」を勇士たちの遺体に注いで回ると、チャルギン翁

初め勇士全員がたちまち起き上がった〔同上 二八〇頁〕。

勇士ゲレルテイ・セチュンとチン・ビシレルの二人が死んだ。彼らの魂が行方不明にならないように、バムソルジャはその魂を二羽の鷹の体内に一時的に預けた。甘露水を得た後に、その二羽の鷹が飛んできたのに気づいたバムソルジャは、袋に入れておいた二人の遺体を取り出し甘露水を注いだ。すると二人は生き返って立ち上がった〔同上 二八一頁〕。

ゲセル・ハーン物語に見られる、「死後なおその魂は不滅で、特定の行先はなく空間をただ彷徨う」という発想は、モンゴル語の靈魂「スウンス」というシャーマニズム的思考と相通じるものがある。

二一四 コリヤクとユカギル

(ア) コリヤク

一九〇一年にジョチエルソン (W. Jochelson) が聴取した神話「エメムクトは弟を探しに行く」〔Jochelson, W. 一九〇八 一二八―一三〇頁〕では、弟の骨とシャーマンの他にトナカイの血が蘇生の鍵を握っている。

突然行方不明になった弟を探しに行った兄エメムクト (Eme'ingtu) は、人食い部族に襲われ骨と剥がされた皮だけが残された弟の遺体を発見した。皮は寝床の上に広げられていた。兄は弟の皮を持ち帰り、弟を生き返らせるためにシャーマンを探しにいくと、その娘が現れた。娘は言う。「まずは死んだ野生

のトナカイを、その脊椎の一個から生き返らせてみよう。その

のち、あなたの弟を生き返らせよう。彼女は脊椎に向かつて呪文を唱え始めた。すると突然脊椎からトナカイが立ち上がり走り去った。彼女は「これなら、あなたの弟を生き返らせることができると思う」と言った。そこでエメムクトはその娘を家に連れて行った。まず白トナカイの皮を敷きその上に弟の皮を置く。更にもう一枚、トナカイの皮を被せた。次に娘が呪文を唱え始めると、先ず皮の下から二本の足があらわれ、頭が突き出した。次に皮のカバーが持ちあがり、ついには弟の体が起き上がった。そこで彼らは屠殺したばかりのトナカイの血を弟の頭に注いだ。そして彼に骨髓を食べさせて『骨髓の味がするか』と尋ねた。『いや、木の切れ端のようだ』と弟は答える。さらにトナカイの血を弟の頭に注いで、再び骨髓を与えて尋ねた。『今度は味がわかるか?』すると今度は、『ああ、トナカイの群れを見張っているとき何時も味わったように甘い味がする』という答えた。こうして弟は完全に蘇ったのである。その後兄はシャーマンの娘と結婚し、彼らは幸福に暮らした〔Jochelson, W. 一九〇八 一二八―一三〇頁〕。

この話の注釈には Northern British Columbia 海岸の言い伝えが紹介されている。『死人の骨(複数)を二枚のマットの間に置く。儀式の間に、その骨は肉で覆われ、死人が再び生き返る』〔Bosq, E. 一九〇二 二二四頁〕。

コリヤクの靈魂観では、悪霊カラウ (kalan) に襲われた魂

四四―四八頁〕。

コリヤク、ユカギルの居住地はブリヤートやモンゴルよりもやや北方に位置するが、この物語で蘇生の鍵となる「命と若さの水」の伝承は、ブリヤートの「命の水」やモンゴルの「甘露水」の影響である可能性は否めない。

また、伝承「アルダーブロック (The Alder-Block)」〔同上 五六―五八頁〕では、「命と若さの水」を飲むと怪我が治り、若返る。「死の水」を飲むと死ぬ、とされる。

ユカギルの狩人達は、死んだ動物の骨が組み立てられると再び生き返ると信じていた。そのためクマ、ヘラジカ、鹿などの骨を犬や野生動物が食い荒らすのを防ぐために、骨の集積所を設けていた。食糧難の際に骨の髄を取り出して飢えをしのぐ目的もあったものと思われる。ある地方のユカギル (Yasachnaya Yukaghin) の間では、骨が元に姿に戻ることを願って、食べられない魚の骨を川に投げ返す習慣がいまだに続いているという〔Jochelson W. 一九一〇 一四八頁〕。

北極海に面したチュクチの一部では、海岸でセイウチを撃ち、食に供した後のその骨を海に投げ入れる習慣がある。そうすれば、そのセイウチが再び生き返ると信じているからである〔Bogoras W. 一九〇四 三三六頁〕。

ウイシテは、驚いて遺体を見捨て神のもとに逃げる。魂そのものは不滅であり、転生して、神が親戚の母の子宮に送り込む。しかし、親しい人を失うと誰もがその人の蘇りを願うものである。一方、狩猟を生活の生業とするコリヤクでは、大漁を願い獲物の骨を祀る信仰が普及している。シャーマニズムを通してこれらの願いを実現したいという思いが、この話からと伝わってくる。

(イ) ユカギル

コリマ川流域のユカギルに伝わる話「鳥の物語」

さらわれた妹を見つけるため兄たちは末弟を残して探しに向かったが、その途中、兄たちは鳥に騙され食べられてしまう。鳥に捕えられていた妹は、亡くなった兄たちの骨を拾い集め、袋に入れ木につるして保存した。一人取り残された末弟は行方不明となった妹と兄たちを探し出し、妹を捕らえた鳥を殺して妹に尋ねた。『兄たちの骨はどこ?』彼女は木に登り保存してあった兄たちの骨を降ろした。彼は倉庫に入り、そこに保存された『命と若さの水』を入れた瓶と、一番上の兄たちの骨を取りだして並べた。そして命と若さの水をその骨に振り注いだ。はじめ、骨の上に肉が付き、次に注ぐとその肉が皮で覆われた。三度目にはついに、兄は座を組んで、『ああ、ああ、ああー私も長く寝すぎたが、とても元気だ』と叫んだ。二人目の兄の骨にも命の水を三回かけて、彼を蘇らせた〔Bogoras W. 一九一八

三 まつめ

以上述べた諸民族の靈魂観ならびに生命の蘇生手段には、概ね以下の共通性がある。

- ① 出生、生命活動(病氣、夢、思考)、死に関連した三つの魂が存在する。
- ② 死後肉体を離れた靈魂は、冥界へと向かうのかそのまま滅なのか、考え方は分かれるが、いずれ生まれ変わって子孫へと受け継がれる点では共通している。
- ③ 魂は体の各部位にあり、その部位の魂が傷つくと肉体もまた傷つく。人が病気になるのは、魂が邪悪な靈に驚いて体外へ逃れたことによる。
- ④ 人がみる夢は、魂が一時的に肉体を離れて体験したことを表す。
- ⑤ 死体が朽ちても全身の骨さえあれば、それに魂を戻して蘇生させることができる。
- ⑥ 全身の骨はもとより、シャーマン、カッコウ、命の水、甘露水、トナカイの血などの援助も蘇生には欠かせない。

次に、各民族の生命の蘇生手段をまとめると次の表のようになる。

民族	遺体や骨	シャーマン	補助手段	魂の場所など
ホジエン	全身の骨	シャーマン	シャーマン踊り	冥界(仏教)
モンゴル	全身の骨	なし	甘露水、命の水	鷹の体内
モンゴル	遺骨や遺体	なし	甘露水	不明
ブリアート	全身の骨	カッコウ	命の水	不明
ブリアート	骨	なし	命の水	不明
コリヤク	トナカイの脊椎	シャーマン	トナカイの血	トナカイが蘇生
コリヤク	全皮膚(骨なし)	シャーマン	トナカイの血	不明
ユカギル	全身の骨	なし	命と若さの水	不明

とりわけ北東アジアの狩猟民族には、熊などの頭骸骨を樹上に祀り、再び獲物が獲れる事を祈る傾向がある。全身の骨さえあれば獲物を蘇生させることが出来ると信じているのである。

このような骨や遺体からの蘇生神話は、北東アジアのみならず世界中に遍く存在する。グリム童話の「フィッチャーの鳥」(四六番)もそのひとつである。姉二人が悪い魔法使いに殺されるが、末妹がバラバラにされた姉たちの手足を並べると、姉たちは生き返る。三人は村人を呼び集めて、その魔法使いを退治する。この童話には魂は登場しないが、身体が元の形に戻れば生命を復活できるという想いは共通している。

また「ねずみの木の話」(四七番)では、ねずみの木への願いが叶い母親が男の子を授かる。その母は出産後まもなく死に、意地悪な継母がやってくる。男の子はその継母に殺され無残にもスーぷにされてしまう。仲良しだった妹は兄の死を悼み、全身の骨

を絹の袋に詰めてねずみの木の根元に置いた。その骨は小鳥に変わり継母への復讐を果たした後、再び兄は元の姿に戻るのである。ヨーロッパから遠く離れた中国にもよく似た昔話が残っている。「蛇髻人(蛇郎)」や「シンデレラ譚(灰姑娘)」では、殺された娘の魂が小鳥に変身し復讐を果たして、元の姿に戻る。こうした物語は復讐や勧善懲悪をテーマとしつつも、魂は不滅であるという靈魂観や遺体からの蘇生への願いは、古今東西を問わず普遍的な信仰であると思わざるを得ない。

終わりに

筆者が研究対象としたホジエン族の口承では、死者の靈魂は冥界へ行く。シャーマンは死者を生き返らせるため、冥界から靈魂を取り戻して死者を蘇らせる。そのひとつ「シタ・モルゲン」では死体の代わりに全身の骨が対象となり、シャーマンの儀式により母を蘇らせる。

一方、他の北東アジアの口承にはホジエン族と異なる点も多い。靈魂は冥界には向かわず空間を彷徨う。骨そのものに魂が住むようである。全身の骨はもとより、命の水などにか神聖なもの支えが重要とされる。シャーマンがいない場合は、神聖な鳥、カッコウがシャーマンの役割を担う。

このように民族ごとに靈魂観はさまざまあるが、親兄弟など親しい人を亡くした人々が、靈魂を不滅と信じ、再び生き返る

てほしいと願う思いは共通であろう。狩猟民族であれば、生活の糧としての獲物が再び獲れるように、その骨を祀る願望も共通したものである。

さらに、イマカンやゲセル・ハーン物語、神話など北東アジアの民族に遍く伝わる伝承は、シャーマニズムや仏教・道教の教えを反映していると同時に、その民族の娯楽であり人々の切なる願いを訴えていると思われる。

本論で取り扱った資料は、二〇世紀前半に行われた調査に基づくものであり、その後の教育の普及や経済基盤の度重なる変化により、少数民族の独自言語を話す人口も激減し、その独自文化を失いつつある。

また狩猟民族という観点に立てば、対象を世界に広げて論及すべきであるが、筆者が長年研究に携わったホジエン族とその周辺民族の影響を深く分析するために、本論では敢えて北東アジアの民族に限定させていただくこととした。今後は、日本にも馴染みの深いアイヌ民族の靈魂観と北東アジアとの関連性など、研究対象を更に拡充したい。

なお、ここで使用した英語の資料の多くは、WEB上で公開されている。

文献

凌純声『松花江下遊的赫哲族』一九三四 上海文芸出版社
黒龍江省民間文芸家協会『伊瑪堪』(下)一九九九 黒龍江人民出

版社
于晓飛『消滅の危機に瀕した中国少数民族の言語と文化』二〇〇五
明石書店

Bogoras, Waldemar 『The Chukchee』一九〇四 The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History Vol. VII. (WEB [デジタルライブラリー digitallibrary.amnh.org](http://digitallibrary.amnh.org))
Bogoras, W. 『Tales of Yukaghir, Lamut and Russanized natives of Eastern Siberia, Tales of Eastern Siberia』一九一八 Anthropological Papers American Museum of Natural History. Vol. XX, Part I, New York. Published by order of the trustees
Jochelson, Waldemar 『The Koryak』一九〇八 The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History Vol. VI. (WEB [デジタルライブラリー digitallibrary.amnh.org](http://digitallibrary.amnh.org))
Jochelson, W. 『Yukaghir and the Yukaghirized Tungus, Part I』一九一〇 The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History Vol. IX, Part I. (WEB [デジタルライブラリー digitallibrary.amnh.org](http://digitallibrary.amnh.org))
Jochelson, W. 『The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus, Part III』一九二六 The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History Vol. IX, Part III. (WEB [デジタルライブラリー digitallibrary.amnh.org](http://digitallibrary.amnh.org))
Curtin, Jeremiah 『A Journey in Southern Siberia—The Mongols, their religion and their myths』一九〇九 Little, Brown and Company (Boston)
WEB [上で公開されています。 https://www.sacred-texts.com/asia/jss/index.htm](http://www.sacred-texts.com/asia/jss/index.htm)

Czaplicka, M.A. 『Shamanism in Siberia excerpts from Aboriginal Siberia—A study in Social Anthropology』一九一四 <https://sacred-texts.com/sha/si/index.htm>

Lopatin, I.A. (Лопатин И. А.) 『Топись : Амурские, Уссурийские и Сунгарийские』一九三五 Г. Браунроокт. (トリス族：ムール、ウスリー、スンガリー河流域)
Shirokogorov, S.M. 『Psychomental Complex of the Tungus』一九三五 Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., LTD. LONDON
PDF: https://openlibrary.org/works/OL6682722W/Psychomental_complex_of_the_Tungus
http://www.shirokogorov.ru/s-m-shirokogorov/publications/psychomental-complex-tungus-01_02_03_04
シロコフ著川久保悌郎・田中克己訳『北方ツングースの社会構成』一九八二 岩波書店
ウノ・ハルヴァ著、田中克彦訳『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—』一九七一 三省堂
若松寛訳『ゲセル・ヒーロー物語—モンゴル英雄叙事詩』一九九三 東洋文庫五六六 平凡社
サランコフ「内モンゴル」@ホルチン地方の靈魂観と悪霊に「ツング」『比較民俗研究』j26. 2011/6 二〇一一 WEB [デジタルライブラリー](http://www.comparativefolklore.com)で入手可能
Boas, F. 『Tsimshian Texts』一九〇一 Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology, Bulletin 27, Washington
WEB: <http://www.archive.org/details/cu31924027107816> (つ・しやうひ／日本大学法学部)

「かちかち山」の国際比較 —モティーフと文化の共通性—

一 はじめに

「かちかち山」の昔話は広く知られているが、大変に不条理な展開といえる。子どもの頃、本でこの話を読み、兎の徹底的な懲らしめに驚いた記憶がある。また、狸の行動も兎に劣らず冷酷で残忍なところがある。現代でもその内容がしばしば話題になったりする¹⁾。

本稿では「かちかち山」の昔話をモティーフのレベルでの国際比較を試みる。すでに「かちかち山」については、国内の研究が進んでいることを先行研究の紹介で示しておいた。ただし、国外との研究はまだ研究の余地があり、今回は「かちかち山」と同じモティーフを持つ、海外の資料との比較を中心に、分析し考察を行うことにする。

三章以下では、日本の「かちかち山」のモティーフである「婆汁」「かちかち鳥」「尻の栓」「木舟泥舟」と、共通する諸外国の

川村 直人

同一モティーフを表にして対照する。国際比較は言語の障害があり、容易にできるものではないが、昔話の背景となる民俗や生活、文化的背景を考慮しながら慎重に進めたい。

「かちかち山」は日本では一つの話型として安定しているが、国外で同じ話型のものを見つけることは難しい。しかし、モティーフのレベルでの類似は国外でも多く見つけられるので、本稿はそうした点から「かちかち山」の国際比較についての問題提起できればと考えている。

二 「かちかち山」の先行研究

「かちかち山」の研究に先鞭をつけたのは柳田國男の「かちかち山」(一九三六年)で、その後の研究のベースになっている。柳田は「かちかち山」を三つに分け、第一を「爺が狸を捕まえる」、第二を「狸が婆を殺し逃げる」、第三を「兎が狸に仇討ちする」とし、それらはもともと独立した話であったとする。な